

## A-63) 特発性眼窩内骨膜下血腫の1例

藤井登志春・四十住伸一 (公立能登総合病院)  
脳神経外科

症例は41歳女性で、昭和62年7月28日より前額部痛を認め、翌日より左眼瞼腫脹と眼痛が出現した。症状出現以前に外傷の既往はなかった。神経学的には左眼の視力低下、瞳孔散大、対光反射消失、全方向にわたる眼球運動制限と眼球突出を認めた。CTでは左眼窩内鼻側上部の筋肉錐外側に造影効果を示さない低吸収域を認めた。

昭和62年8月7日、左前頭開頭により intracranial-extradural frontal approach を行なった。眼窩上壁を除去すると血腫を認め吸引除去したが、それ以外に出血源となるような異常は認めなかった。術直後より左眼球運動、眼球突出は改善し、手術1カ月後には左視力は0.6まで改善した。

眼窩内骨膜下血腫の原因としては外傷が最も多いが、その他に血友病、壊血病、尿毒症等によるものが報告されている。本例はこのいずれにも該当せず、また眼窩内にも出血の原因となるような異常を認めなかったため、きわめて稀な特発性眼窩内骨膜下血腫の一例と考えられた。

## A-64) MRI 上、圧迫血管を確認し得た顔面痙攣の1例

奥村 智吉・徳田 禎久 (禎心会病院)  
堀田 隆史・和田 啓二  
瓢子 敏夫・高坂 研一 (中村記念病院)  
岡 亨治・佐土根 朗 (脳神経外科)  
鈴木 知毅・中村順一

MRI は、Bone artifact のために CT が苦手としていた天幕下病変の描出に優れている。今回、我々は、MRI 上圧迫血管が確認され、Neuro-vascular decompression 術により症状の改善を見た顔面痙攣の1例を経験した。症例は、52歳男性で、顔面麻痺の既往はなく、顔面痙攣は2年前に出現し、徐々に進行してきた。来院時、左口角から眼瞼にかけて頻回に顔面痙攣が見られたが、外に神経学的異常は認められなかった。MRI では、T<sub>1</sub> 強調画像 (SE-500/35) にて、2本の椎骨動脈が脳幹を左から右に圧迫しており、Facial nerve が、exit zone でこれらの血管と他の細い血管の合計3本の血管で圧迫されているのが確認された。椎骨動脈撮影でも、左右の椎骨動脈が左に偏位しており、それに沿って左前下小脳動脈が走行しているのが確認された。術中所見でも、これら3本の血管が顔面神経を圧迫していた。術後には、症状の改善がみられ、MRI でも顔面神経の減圧が確認さ

れた。MRI は、顔面痙攣においても、原因となっている血管を確認することが出来て有用であると考えられた。

## A-65) 副神経脊髄根病変部の切除が奏効した片側性痙攣性斜頸の2例

齊藤伸二郎・板垣 晋一 (山形大学)  
脳神経外科  
中井 晶 (北越病院)  
脳神経外科  
祖父江八紀

共通の筋電図所見を示した片側性痙攣性斜頸2例に対し、副神経脊髄根病変の切除を行ったところ著効を得た。2例の手術前後の筋電図所見及び手術所見を報告し、痙攣性斜頸の病因につき考察する。症例1は47才の男性。発症前に頸部の外傷の既往があり、患側頸部の痛みを伴っていた。症例2は36才の男性。ともに horizontal turnig を主体とする痙攣性斜頸であった。筋電図所見：2例とも1) 異常自発筋放電が患側の副神経支配筋に局限し、2) この発火頻度が高く、3) 胸鎖乳突筋と僧帽筋間の異常共同運動を認め、一側副神経のみの病変が示唆された。手術所見：症例1では副神経 C<sub>1</sub> 根が椎骨動脈と歯状靭帯との間を通り、この部で両者と強く癒着し伸展していた。症例2では C<sub>1</sub> 前根から副神経へ吻合する aberrant root が椎骨動脈と歯状靭帯との間を通り、椎骨動脈と癒着していた。これらを病変と考え切除した。術後：服薬による痙攣をきたすことなく、症例1は著明に改善、症例2は4ヶ月後より完全に消失した。筋電図でも異常筋放電、異常共同運動は消失した。

## A-66) 治療により CT 上消失した脳幹神経膠腫2例の MRI

佐藤 清・高浜 秀俊 (山形大学)  
脳神経外科  
山田 潔忠・中井 晶  
川上 千之・平林 賢一 (米沢三友堂病院)  
脳神経外科

MRI は組織間コントラスト分解能に優れ、X線 CT (CT) で描出されないような変化をもとらえ得る場合がある。治療後症状消失とともに CT 所見の正常化した、脳患部の神経膠腫と思われる2例に MRI を施行したところ、以前 CT で認めた病変部位が脳実質とは明らかに異なる信号域として描出されたので報告する。症例1：5才女児。左下肢の運動失調、左片麻痺、右外転神経麻痺等の症状があり、CT では中脳から橋右側よりに ring 状に enhance される lesion を認め、周囲に浮腫を伴っていた。治療後、症状、CT の異常所見は徐々に消失し